

「かもめ食堂」港区でスタート



「かもめ食堂」で一緒に食事する施設の利用者(右端)と地域の住民ら「港区の「かもめくらぶ」で

精神障害者と食の交流

精神障害者とテーブルを囲んで食事を楽しむ「かもめ食堂」が港区でスタートした。子どもの貧困対策として全国的に広がった子ども食堂の取り組みにヒントを得た。食の交流を通じて偏見のない社会を目指す。関係者は息の長い取り組みに育てたいと願っている。

(武藤周吉)

食堂を運営するのは、市の委託を受けて障害者支援をしている港区障害者基幹相談支援センター。区内にある精神障害者の通所施設「かもめくらぶ」の一室を使い、施設の利用者を囲みながら大人三百円、子ども百円で昼食を提供する。

取り組みを始めたのは、副センター長の海田弘幸さん(四七)が精神障害者への理解を進める活動に手詰まりを感じていたからだ。

精神障害者は見た目が健全者と変わらず、生きづら

さを抱えがちで、長期間障害が気付かれないケースも多い。「変わった人」と見られ、偏見にさらされる場面もある。一方、大型ショッピングセンターなどで従来の啓発イベントを開いても素通りされるばかり。地域で継続的に交流できる場が不可欠だと考えた。

そこで注目したのは子ども食堂だった。子どもの食事や居場所づくりの支援を目的に、地域コミュニティが連携する取り組みとして急速に広がっていた。海

田さんは港区内の子ども食堂を視察して、運営ノウハウを学んだり、食材を無償で提供してもらうネットワークづくりをしたり。理念に共感したかもめくらぶ施設長の田中宝作さん(四三)とともに八月三日、初開催にこぎつけた。

十一月十九日に開かれた二回目のかもめ食堂では、用意した五十食分がほぼ完食。チラシを見て集まった近所のお年寄りや幼い子連れの親たちが訪れ、精神障害者とともに、かぼちゃご飯に豚肉のホイル焼き、野菜たっぷりのけんちん汁を味わいながら会話を楽しんだ。施設に通う男性(四三)は「普段は知らない人と交わる機会はほとんどないが、とても良い雰囲気を楽しめた。みんなで食べるとご飯もおいしい」と声を弾ませていた。

今後の目標は月一回の定期開催だが、当面は季節ごとの開催を継続していく。海田さんは「障害のある人が隣にいる。そんな当たり前を実感してもらうことで精神障害への理解を進め、支援の手があることを知らせていきたい」と話している。

市民版

ガーデンスクラメン



茂谷 朝子
水葉会所属(緑区)

ニュース、情報は社会部へ
231-7333 Fax201-4331
Eメール
shakai@chunichi.co.jp
中日新聞へのご意見は
読者センターへ
221-0800 Fax221-0819
Eメール
center@chunichi.co.jp

掲載写真を購入希望の方は
最寄りの中日新聞販売店へ

上野天満宮

学問守護・厄除招福 交通安全
名古屋天神
名古屋市中種区赤坂町4-89
電話(三)六八二〇〇 FAX(三)六八二〇一

- 合格祈願 ●厄払い
- 自動車技 ●安産祈願
- 初宮詣り ●七五三詣
- 地鎮祭 ●竣工祭
- 各種ご祈禱 ●出張祭
- 年中受付